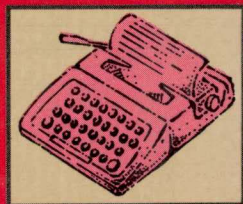
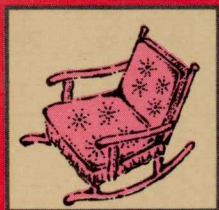
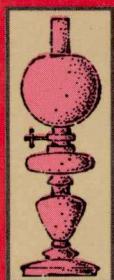


MARY JO BANE

いま家庭で

アメリカ女性の自立とその子供たちの立場

青木久男 訳



多賀出版

〔訳者略歴〕

青木久男

1926年 群馬県に生まる
現 在 日本大学助教授
日本翻訳家協会会員
著 書 E. コールドウェル研究序説（和広出版）
（日本図書館協会選定図書・ジョージア大学・
ダートマス大学等で所収）
主 な 訳 書 テクノロジー時代（南雲堂）
噂の女クロードル（南雲堂）など

いま家庭で

1980年10月15日 印刷

1980年10月20日 発行

著 者 Mary Jo Bane

訳 者 青 木 久 男

発行者 多 賀 省 次

印刷者 柳 瀬 二 郎

製本者 高 橋 幸 三

発行所 多賀出版株式会社

東京都千代田区飯田橋3-2-12

山 田 ラ イ ン ビ ル 2 F

電 話：03（262）9996（代）

振 替 口 座：東 京 8-84518

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

昭和工業写真印刷所／美行製本

1036-800051-4484

MARY JO BANE

いま家庭で

アメリカ女性の自立とその子供たちの立場

青木久男 訳

多賀出版

HERE TO STAY :
AMERICAN FAMILIES IN THE TWENTIETH CENTURY

Copyright (C)1976 by Mary Jo Bane
Japanese translation rights arranged with
Basic Books Inc., New York
through Tuttle-Mori Agency, Inc., Tokyo

目次

序論	九
----	---

第1部 女性の解放

第1章 家庭方針のジレンマ <i>dilemma</i>	二〇
1 家庭と世帯の自治	二〇

第2章 男女平等と家庭責任——夫と妻

1 女性の経済的地位	二六
2 男女平等の経済的立場とその家庭	二九
3 家庭と雇用	三一
4 日常の世話	三三
5 出産と育児休暇	三六
6 男女平等と家庭の役割	四四

7	仕事・女性の地位・家庭	五〇
第3章	家庭のプライバシーと家庭責任——大人と子供	
1	自立する子供	五四
2	保護者としての家庭	五六
3	保護者としての州	五九
4	現代の均衡	六二
5	消滅なきジレンマ	六六
6	子供の権利	七一
第4章	機会均等と家庭責任	
1	子供の経済的地位	七七
2	老人と若者	八二
3	家庭と地域社会の慈善	八五
4	若者への投資	九一
5	社会保険	九三
6	生涯保険	九六

7	片親の恩恵.....	九九
---	------------	----

第2部 血縁関係の持続性

第5章 両親と子供たち

✓1	人口学的事実と社会の年齢構成.....	一一二
✓2	子なし夫婦と家庭の規模.....	一一六
3	子供的生活調整.....	一二二
4	子供の世話の調整.....	一二六
5	両親と十代の子供.....	一二九
6	家庭と社会の子供.....	一三一

第6章 夫と妻

1	結婚率.....	一三四
2	結婚年齢.....	一三五
3	結婚生活のサイクル.....	一三六
✓4	主婦の仕事.....	一四一

5	結婚生活の不確実性	一四四
6	離婚の相関関係	一四六
7	再婚	一四九
8	結婚と社会	一五一
第7章 大世帯の家庭——寝・食		
1	世帯の歴史	一五五
2	独身者	一五八
3	新婚夫婦	一六〇
4	やもめと離婚者	一六一
5	老人問題	一六三
6	時間を超えた変遷	一六七
第8章 大世帯——親類と縁者		
✓1	家庭の規模	一七四
2	地域社会の規模	一七五
3	職場の規模	一七九

第3部 資料

4	家庭と職場	一八二
5	地理的移動性	一八四
6	職業の移動性	一八六
7	友人・隣人・親類	一八七
8	会 員	一八八
9	派閥と階級と「家庭」	一九〇
10	社会活動と社会	一九一

1	付 表	一九七
2	付表注	二〇七
3	注	二一二
	結 論	二四一
	訳者あとがき	二四四

序 論

アメリカの家庭は、今やありし日の幻影にすぎない。家庭崩壊の原因は、一つには経済的な、一つには文化的なものに由来した。

その家庭は、こよなく発展した時でさえ、都会人にも海上生活者にとっても適当な場所ではなかった。

バートランド・ラッセル 一九二九年 (注1)

アメリカの家庭は崩壊しつつある。

イサカ・ジャーナル 一九七五年 (注2)

家庭が崩れかけているという所見は、目新しいものではない。しかし現代では、家庭が攻撃されると、結局は降服するという考えが以前より広まっている。勝手な主張をするその攻撃者とは、性急な、現代生活のテンポである。それは、はかなく、すぐ衰退するという特徴を持っている。地域から地域への移動、すぐに使われ、捨てられ買い換えられるように考案された商品にもアメリカ人の生活の特徴を見ることができ、物質生活面でのこ

の永続性の欠如は、生活感情や社会生活に入り込んでいるようだが、最近の「友情と結婚生活」に関する諸論文にも、これらは全くはかなく交代するものとして論じられている。^(注3) アメリカの人びとは、「家庭」とは無条件で、永続性ある人間の絆を要する場所と考えてきたし、現在でもこの考え方に変わりはないが、果たして先に述べた攻撃から家庭はどのようにして生き残ることができるだろうか？

たとえ生き残ったとしても、その他、例えば緩慢ではあるが不可避免的な「男女平等運動」からの攻撃もあろう。というのは、多数の保守主義者や急進的なフェミニストたちが、男女平等を家庭生活の矛盾と観ているからである。^(注4) 女性に男性と平等に就職のチャンスがあれば、働いた上に家庭の世話をしなければならぬやうな気のある男性を恐らくは破滅させるだろう。女性は自活や経済的成功に賛同して、出産や育児を拒否するかも知れない。彼女らが結婚して仕事を優先させると、仕事と家庭との葛藤が生ずることになり、家庭を有意義にさせる感情の綾と家庭への関心を破壊する結果を招くことになろう。現代の家庭は、基本的に独り暮らしをする人間の集合場所へと変容する過渡期にあつて、仕事と一時凌ぎの社交の集合場所になり果てているのだろうか？

差し迫つた家庭崩壊の、予言的議論にはかなり多くの統計的論拠があつて支持されている——急増する離婚率、下降する出産率、増大する主婦の外働き、家庭の生産的・経済的機能の低減、核家族の出現。これらの統計を見ただけで、組織としての家庭がこの世の終末に到達しているという十分な証明にはならないだろうか？ 私たちは現代の家庭を今までと相違した生活様式と子育て方法に改善を加えるべきではないのか？ だが、著者は「現代アメリカ家庭とその子供たちの立場」の研究に着手した時点で、その面では肯定的であると確信している。

しかも、著者はアメリカ人が何をなし、どの様に暮らしているかについての資料を研究した結果、アメリカの

家庭はさほど苦悩していない、と思った。彼らの生活には、人間関係の安定性、持続性があることを確認した。本書の題名は執筆中何度か変更したが、結局は表題のとおりで、家庭内の死亡、遺産配分などの記事を執筆する時期はまだ到来していない、と確信した。

反面、私が家庭に関する自分の疑問に答える事は——現実遊離の神話に等しいが——興味あるだけでなく重要なことであると確信した。今や家庭に影響を及ぼすような大衆の意志決定は定期的に実行され、墮胎、離婚の再編成、男女平等、福祉、税、家族と子供との社会奉仕などの論議が常時行われ、過熱気味でさえある。特殊法案や法廷に関する諸疑問については、アメリカの家庭を人口論的、歴史的観点から研究するだけでは対応できない面が生じてきている。だが、これら特殊政策の背景に潜む基本的推測や価値を考察すれば、そこには家庭に及ぼす影響を論じえる事実が列挙されている。例えば、家庭が死滅または死滅しつつあると推測した場合、次のような政策が導き出せるだろう。つまり、一患者を生存させようと必死の努力をしたため、患者以外の価値ある者に不当な損害を与えれば、その努力は病気の治療以上に有害であることがわかる。一方、「死滅する」家庭を調整しようと余り早急な関心を抱くことは、事実上時宜を得ない死滅をもたらすかも知れない。だが、これらの有害解答は、家庭の現状に関するよりよい正確な処方箋によって除去できるかもしれないのである。

本書は、第二部で今世紀のアメリカ家庭の変遷の様相を観察している。第五章では著者が脚光を当てたと思われる諸政策の該当地域を調査している。「アメリカの家庭」を論じるに当たっては、家庭構成と家庭崩壊、国勢調査と世論調査に基づく「生活再編成」に関する資料に着目した。もちろんその他の資料もある。それらは「家庭生活状況の指針」と見なすことができる——日記、育児指導書、新聞報道、テレビの喜劇番組、コマーシャルで

の家庭点描——などがある。著者のこの研究は主として人口学的指針に依存している。その理由は、第三者的立場で人間行動を観察した方が、当時者の行動報告よりもより適確な行動描写を提供していると思えるからである。例えば歴史家は、家庭の規模に関する彼らの個人的観察と、実際の家庭に関する数値で示された統計資料による観察との間に多くの相違点のある事に気がついている。^(注5)さらに、テレビに映るアメリカ家庭の描写だけに依存する人びとは、主婦たちの仕事は引き合わないと考え、統計値は誤っていると結論づけるであろう。

その「数量的資料」には最近流行の心理学的解釈の余地はないが、そこにはかなり正確で信頼できる利点がある。「行動に関する資料」は、現況と将来とを論述する立派な論拠を提供してくれる。だが、それには読者の方で事態の推移を自分で説明できる準備がなければならない。

1部と2部では「特殊集団」——例えば、知恵遅れや身体障害者——に着目していない。それらの者は確かに大衆の関心と救済とを要する事を読者に認識して頂きたい。それに本書では黒人、スペイン語を話す人びと、土着のアメリカ人の家庭を明確には採り上げていない。資料に基づく一般家庭の記述は、多数の白人はもちろん、少数派に属する種族にも及んでいる。例えば、出産率の低下、離婚率の上昇などは全集団の共通した特徴である。しかし、種族集団では核家族と大家族との間に家族構成と団結力に相違が認められ、男女間を特徴づける仕事の役割にも相違が現れている。読者はこれらの相違点を銘記し、本書で示される家庭生活の概観は必ずしも完全な家庭、または種族集団を論述しているのではない事をご理解いただきたい。

さらに一つの警告——アメリカ西部の家庭は北部の家庭の特性を示していると思えてならないことである。植民地時代からアメリカ北部の家庭はずっと核家族構成であり、個人的で、比較的子供中心の家庭であった。しか

し、ヨーロッパ大陸では個人的で子供中心主義の家庭は、やっと一七世紀になってから発展した。それ以前のヨーロッパ大陸の家庭はずっと社会中心主義で、そこには浸透的境界線が存在したのである。大人と子供は社会で大いに活動し、家庭で落ち着いた。しかし、ヨーロッパ初期の家庭は現代と相違し、死亡率、特に乳幼児の死亡率が高く、男女集団の残酷なまでの貧困が存在した。その家庭はアメリカ神話に見られる、楽しい大家族の比ではなかったし、もし貴族だけに着目していなければノスタルジヤは保証されない。^(注6)ともあれ、その家庭はありし日のアメリカの一部ではなく、かくして本書の一部分にも見当たらない次第である。

第1部
女性の解放